

研究テーマ 早期警告スコアリングシステム導入課程における
看護師の自己効力感の変化

病院名 医療法人社団健育会 西伊豆健育会病院

演者 ^{とのおかあかり}
○外岡明香梨(看護師) 永原美里(看護師) 藤井聡(看護師)
大村啓子(看護師)

概要

【研究背景】

看護師が急変兆候に気づき、報告するためには、一定の効果があるとされる早期警告スコアリングシステム(以下NEWS2)を導入することが望ましいが、導入のためには教育が必要である。導入の効果について調べた研究はあるが、その教育課程に焦点を当てた研究は無い。

【研究目的】

看護師が急変兆候の報告についてNEWS2活用の教育を受け、それを用いることで、自己効力感への影響があるかを調査する。

【研究方法】

1. 研究デザイン: 介入研究
2. 研究対象者: A病院に勤務している看護師23名・准看護師6名 計29名
3. 調査期間: 令和5年6月～10月
4. 調査内容: 対象者を無作為法にて2群に分け、介入群にNEWS2・SBARについての集合研修を2回実施した。研修前後でGSESとBanduraの自己効力感を高める方法に基づくアンケートを実施した。
5. 分析方法: GSESと自己効力感アンケートを合計3回実施し、介入群・非介入群別、臨床経験別に繰り返しのある二元配置分散分析・ χ^2 検定を行った。

【結果】

介入群。非介入群別ではGSESはP値0.38と有意差は認められなかった。基本属性から臨床経験年数とGSESの得点の関連を分析したがP値0.38と有意差は見られなかった。介入群の自己効力感アンケートでは介入2ヶ月後で、質問1「ねぎらいの言葉をかけられたことがある」、質問3「自分で自分を褒めたことがある」ではともにP値0.057と、自己効力感が向上した傾向が見られた。

【考察】

両群のGSES得点に有意差がなかったのは、実施期間が短く、NEWS2の定着や達成経験が少なかったことが考えられる。また、勉強会の回数が2回だったことから、報告における心理的重圧を取り除くことに至らず、浸透し得なかったことが考えられる。介入群において自己効力感が向上した質問1・3は、言語的説得に該当する。急変兆候の報告を行い、報告相手に労われる体験や、自身で言葉に出し、労う体験が伴った結果、自己効力感が向上したと考える。

【結論】

NEWS2を活用するだけでは自己効力感は変化しなかった。NEWS2やSBARの導入の過程で、教育を行うことで言語的説得は向上する傾向がみられた。

【引用参考文献】

- 1) 吉田えり: 卒後2～5年目の看護師における自己効力感とストレス反応との関連